

新刊紹介

ニヤーヤ・バーシュヤの論理學
——印度古典論理學——

宮坂宥勝著

インド哲學思想史上、論理學にその學說の主勝性を置く學派は、正理學派であり、その學派の根本經典として、それ以前に說かれてゐた論理學說を組織體系づけて編纂されたものが正理經 (Nyāya-sūtra) である。

本書はその正理經に現存する最古の註釋書であるヴァーツヤヤナ (Vātsyāyana A.D. 400-450) 作ニヤーヤ・バーシュヤ (Nyāya-bhāṣya) の邦譯 (第一部、一四二頁) と研究 (第二部、四一三—五五三頁、索引一—四〇頁) とで構成されてゐる。著者が大學卒業以來インド論理學の研究に専念された積年の努力の成果といへよう。

現在、正理經の註釋には、その主要な

ものとして次の如き四種が残されてゐる。

一、ニヤーヤ・バーシュヤ
二、ニヤーヤ・ヴァールテイカ (Nyāya-vārtika……by Uddyotakara. [A.D. 550-600])

三、ニヤーヤ・ヴァールテイカ・ター
トバルヤ・ティールカ (Nyāyavār
tīkatāparayāñkā……by Vācaspati-
miśra [A.D. 850-])

四、ニヤーヤ・ヴァールテイカ・ター
トバルヤ・ティールカ・パリシュツデ
ヤ (Nyāya vārtika tāparaya tīkā-
paricuddhi……by Udayana [A.D.
894頃])

それら諸註釋の中、第一に掲げられる註釋の翻譯と研究が本書に於てなされたのである。

この註釋書の作者ヴァーツヤヤナの年代・傳記は從來詳らかに知られなかつたが、本書は次の如く傳へてゐる。ヴァーツヤヤナとはヴァーツヤ族の後裔者といふ意味であり、文獻には Vātsyāyana, Bhāṣyakāra, Pakṣīśāyamin,

Pakṣīśāyamin 等の呼稱で示され、カーンチ若しくはカーンチに近い南印度の出世である。(元來南インドは中觀哲學の發祥地でもあり、また陳那、シャンカラスグーミン、護法など何れもカーンチ附近の出身といはれるから、そこによくインド論理學と佛教論理學との傳承の事情が考へられる。) そしてこの作者の出世年代は從來、西紀三〇〇—三五〇年と考へられてゐたが、本書では西紀四〇〇—四五〇年と考證される。とにかくこの註釋書の成立年代が四五〇年を最下限とするのであつても、この註釋書が現在する諸註釋中の最古のものであるといふ點で重要であることは云ふ迄もない。そして、若干の例外はあるにしても、この註釋は大體正理經を忠實に解釋してゐるから、正理經を理解するために最も重要な文獻であるといはなければならない。

また佛教論理との關連より見ても、この註釋は重要な役割を果たすものと云へよう。それは、ウッドヨータカラが世親・陳那の說を反駁したのを始めとし、それ以後の諸註釋が陳那・法稱によつて

代表される佛教論理學派と交渉して、それらの影響を蒙つたのに比較して、この註釋はそれ以前のものであり、それらの諸註釋とは逆に陳那・法稱に直接間接の影響をあたへ、佛教論理學派の形成と展開に重要な役割を果たしてゐると思はれるからである。

本書の著者は、かうした點を考慮してこの註釋書の本格的な研究を遂行されたのである。

もつとも、この註釋書の研究は、すでに諸學者によつて考究もされ、或時は、佛教論理學派との論難往復が考究されたとき、それと同時に關說せられ、或時は正理經を中心として正理學派の學說が考究された時に論究せられ、チャー氏の英譯の如きも存するが、それにも拘はらず、本書が吾々を裨益すること極めて大である。

第一部 翻譯は Chowkahmbā Sanskrit Series の刊本を底本として、Ananda, ss 版と Vizangram, ss 版を参照し、章節の區分は Vācaspati-misra の Nyāya-sūci-nibandha を參考にして作され、五

篇十章を以て構成されてゐる。なほ章末

には可成り詳細な註記があたへられ、出典・語義・異本との同異はもとより、從來の研究や第二部研究の直接の素材が指示されてゐて初學者に便宜があたへられてゐる。(註記は必ずしも充分ではないが)

この翻譯の一々については梵文テキストと英譯を参照して他日紹介することにして、今は専ら第二篇研究の部についてしかもその中の佛教との關聯を中心として若干の考證事項を選び出して見よう。

第二部 研究 本研究は前に述べた如く、「インド論理學(認識論)殊にニャーヤ及び佛教論理學の史的展開に對して一つの主要な視點を獲得しようとする」(四一四頁)ところに目的がある。著者は第一部翻譯の成果を依用し、確實にその目的を遂行しようとしたものであり、從來考究された諸研究に對しては、それに依りながらなほ資料的には、更に一層の確實性を附與せんと努力せられ、また從來關說されなかつた事に對しても言及せられて著者の努力の程が伺はれる。その研究の構成は目次に次の如く次第

してゐる。

第二部

第一編 ニャーヤ・バーシユヤの研究

第一章

序論

第一節 ニャーヤ・スートラの成立

第二節 ニャーヤ・スートラの構成について

第三節 スートラに於ける他の思想

第二章

第一節 ニャーヤ・バーシユヤ成立の歴史的思想的背景

第二節 ヴァイシエーシカ哲學との關係

第三節 ヴァイシエーシカ哲學以外の諸學派・諸哲學思想との交渉

第三章

第一節 ニャーヤ・バーシユヤが他の諸學派及び論理學者達に及ぼしたる影響

第二章

第一節 ニャーヤ・バーシユヤの著者並びに成立年代論

第二章

第一節 ニャーヤ・バーシユヤ

の著者並びに著者の註釋的態度と思想的立場

第二節 ニャーヤ・パーシユヤ

の成立年代論

第四章 ニャーヤ・パーシユヤの

論理學的意義

第一節 一般の問題

第二節 特殊の問題

第二篇 索引

(1) ニャーヤ・ストトラ索引

(2) ニャーヤ・パーシユヤ固有術

語索引

「序論」はニャーヤ・パーシユヤの研究に必要な限りに於てのニャーヤ・ストトラについて述べられる。その中、「正理經の成立」に關しては、從來廻諍論や廣破經論等によつて龍樹の學說と正理經の學說との關聯が考究され、現在の正理經は龍樹と同時代若しくはその直後に形成されたものであるといはれてゐるが、著者はそれを承認すると同時に部派佛教の方面からもニャーヤ學說の成立を考察した。すなはち大毘婆舍論に説かれる四師の異說の中の世友の「位の不同」説と

同じものが正理學說の中に見られること、及びその他の例を擧げて、正理經の原始形態は、クシャーナ王朝のカニシカ治政の時から、龍樹が出現するまでの期間に於いて、ほぼ形成せられ、龍樹の論争が契機となつて現存形態の正理經の成立をうながし、やがてその編纂が行はれるに至つたものと推論する。(四一九頁)

「ストトラに於ける他の思想」については、正理學說が、その哲學說は殆んど全て勝論學說を基盤とするから、勝論との關係が最も深く、その外、佛教に於ける中觀派・經量部と毘婆沙師、有部及び部派一般、刹那滅論及びヨーガ思想、ミーマンサ學派、ヴェーダンタ思想、唯物論、ヴェーダ思想、文典學派、チャイナ教等との關聯を、正理學派自體の思想内容乃至他學派との對論の上から推究してゐる。正理經に於ける他學派との思想の交渉を知るに便利である。その中で特に注意される點は、部派佛教や中觀派との論争はしばしば見られるが唯識思想には全然觸れて居ないといふ事である。

第二章 「ニャーヤ・パーシユヤの成立

の歴史的思想的背景」は、パーシユヤと一般インド哲學思想との交流・相互影響の問題を取扱ひ、同時にパーシユヤの論理學の歴史的思想的な位置並びに意義を明かにしようとするものである。始めに勝論を主とし、その外、數論、瑜伽、ミーマンサ、ヴェーダンタ、文典學派、チャイナ教、唯物論、及び佛教内の中觀派、唯識派、佛教一般と次第してパーシユヤと一般思想との交渉が考究される。ここに於いても勝論學派との交渉が他を壓してゐることは勿論であるが、中觀派を中心とした佛教との考證を選び出して、その考證を一瞥して見よう。正理學派と中觀學派との交渉といつても、こゝではパーシユヤと中觀說との關聯を取扱ふのであり、前述の正理經と龍樹との關聯にはふれない。

(一)、正理經四・一・三七「一切は存在せず」といふに對し、ヴァツヤヤーナは、これが *anupalambhika* の説であるといつて、正理經四・二・一八を引き出す註釋の中で述べてゐるが、それを著者は不可得論師と譯し、中觀派を指すといふ。

また、ヴァーツヤナーナは「存在せず (nasti)」の語を註解してそれを nirupā-khya, nirupāhyatā または nirātmanā, nirātmanakā と理解してゐるが、本著者はそれらが中観派で説く無自性のシノニムであるといふ。

(二) ヴァーツヤナーナは、中観派の格關係 (kāraṇa) に對する考へを否定し、(山口博士・中論釋・和澤一、一〇一頁參照) 中観派のそれは單なる實體 (dravyanūtra) 單なる行爲 (karmānūtra) をあらはすに過ぎないとする。(NBh ad NS. II-1-16, IV, 1, 16) (中論第八品參照)

三、ヴァーツヤナーナが、青目釋「中論」の文言に言及し、これを吟味し、攻撃してゐるのが注目せられる。

それ故、ヴァーツヤナーナは青目(三五〇年頃)以後の中観派の主張を素材として疏を作成したといへると著者はいふ。

その他、中観派以外の佛教としては、深密系統の唯識説と推測せられるやうな思想が引用批判せられて居るが、世親の學説はそこに於ては見られないといふ。

次に第三節に於いては、ニャーヤ・パーシユヤが他の諸學派及び論理學者たちに及ぼした影響が考證される。そこに於ける他の諸學派とは勝論のプラシヤスタパーダ、佛教學派では世親・陳那・法稱・サーンキヤ及びヨーガ學派等であり、特に世親・陳那・法稱に與へた影響は佛教論理學研究の上に極めて重要な事であり、本研究の結論とも云ふべき第四章ニャーヤパーシユヤの論理學的意義を導出する爲にも重要な役割を果たすものである。簡単に要點を列記すれば、世親については、(一)世親の現量の定義と推察される「現量はその對象にもとづく識である」といふのと、ヴァーツヤナーナの現量の定義とは同工異曲であり、(二)唯識二十論に於いて、世親が有外境論の量を破する最初に説く、(1)「量によつて存在・非存在が決定せられる」、(2)「すべての量の中で現量が最も重要である」といふ所論は、ヴァーツヤナーナの疏の中にあつても十六諦を樹立する際、その極めて重要な考へ方となつてゐるといふことが指示される。

陳那については、その主著「集量論」との關連が述べられることはいふ迄もないが、その集量論に説かれる「意は感官の一種であるから感官以外の定義は説かれてならないこと、意はかかる意味が默認されてゐるといふわけであるから、この説は眞なりとして是認さるべきである」といふ論旨に對して、陳那は、「沈黙が是認の證據であるならば、何故に『正理經』は他の五感官についても沈黙を守らないか」と反駁する、集量論第二十一偈(本著者譯)が、ヴァーツヤナーナの「疏」を豫想しての反駁であると従來いはれて來てゐるが、本著者もこれのみが唯一の具體的な箇所であると指示し、これと共に集量論の各章に見られる正理學派を破する學說の問題の取扱ひ方は、已に正理經に見出すことが出来るといふ。この觀點に立つて正理經に説かれず、集量論に説かれる四種の現量も、正理學派特にヴァーツヤナーナの所論に直接間接影響されてゐるとなす。それらの主要な點は、陳那が正理學派の現量を破析するのは意の非現量性の追求であるが、その

意についての兩者の取扱ひ方が、著者の根本的な關心をなすものの如くである。

法稱については、その主著「量評釋」の第二章「量の成就」に於ける量の定義中に見られる「矛盾なき認識」(avisaṃvādi jñānam, avisaṃvādanam)と有目的的行爲(arthakriyā)とらふ重要な二概念をバーシヤの所論と考證して、その根據となる「有目的的行爲」を、更に arthakriyācakti を考證してヴァーツァーヤナの影響によるものと、法稱獨自のものとを分析され、その影響が語られる。

以下第三章・第四章に於いて、前來の考證に於ける結論ともいふべきものが、導出される。(一は文化史的に、一は論理的に。)今は本書が所謂外教に屬する論書の研究であつても、それが佛教研究にも極めて有益であることを紹介するために、佛教との關連のみを主として眺めて來た。もとより本研究の價值はそれのみでなく、印度哲學諸派思想研究に重要なことはいふを待たない。

(昭和三十一年十月、東京山喜房佛書林刊、洋A5五九二頁)(荷葉堅正)

“G. Tucci”

(1) THE SACRAL CHARACTER OF THE KINGS OF ANCIENT TIBET

From “EAST and WEST,”

(Year VI, N. 3-October 1955)

ISMEO, Via Merulana 248,

ROMA

(2) THE SYMBOLISM OF THE TEMPLES OF bsam yas

From “EAST and WEST,”

(Year VI, N. 4-January 1956)

これらの論文は、双方とも大部のものではないが、チベット學に關して、なに分にも多くの史料と該博な知識をもたれた教授の研究報告であるだけに、それぞれに興味ある問題を含んでゐる。

第一の論文は、前に同教授によつて出版せられた、チベット王の墓の研究や、系譜についての研究と照合すれば意義深い。

いふ迄もなく、佛教導入以前のチベット史は、きはめて無味乾燥に、しかも部

分的にしか知られてゐないのであるが、さうした中であつて、教授は重要と思はれるいくつかの問題をとらへ、史的研究の限界を守りつつ、それらによく肉を盛り血を通はしめてゐる。以下にその要點を記してみよう。

(イ) 古代チベットに於て、王の世嗣は十三になれば、王位についたといふ一つの事象が確實に考へられること。つまり「ボン人」が自然律法的に成人期に達した時、——その十三といふ數は、完成圓熟を意味してゐるのであつて、これは丁度イラン人に於ける十五、インドの傳統に於ける十六の數に相等しいもの——である。と云ふこと。

(ロ) それに附隨して、王位の後繼者がその適性を獲得するに従つて生ずる重大な事實、すなはち息子が王位繼承の資格を得るや、父は天國に送られる(虐殺して墓地に埋める)のであつて、これは有史時代に入つてもなほ、存続した傾向がある。いはゞ王なるものは、その祖先の靈が、無限に更新されて行く具象化の姿といふ意義を以て、この生界に出現したも